

## WS-4 ワークショップ

### 方言の表記法とフォント開発

小川晋史（熊本県立大学文学部）

#### 要旨

先の発表にあったような方言の記録・保存・継承活動を行っていく上で重要な道具になるのは、方言が1つの体系で書けること、すなわち表記法の存在である。本発表では、実際に琉球諸語の表記法を提案した発表者の経験を踏まえ、まずは、方言の表記法を方言話者に習得してもらうことが、長期的に危機方言の保存・継承に資するのみならず、今すぐの言語研究（者）にとっても有益であるという事例を紹介する。さらに、ワープロソフトやWeb上でも扱うことができるように、最近提案された琉球語諸方言を包摂する表記法（小川編 2015）のための新フォント開発を行ったので、完成した新フォントの仕様説明とデモンストレーションも行う。フォント開発は、将来的に話者がいなくなる可能性も見据えたものである。

#### 1. 琉球諸語統一的表記法

##### 1.1 表記法の提案

発表者の琉球諸語表記法に関する基本的な考え方については小川（2011）に書いたとおりであるが、重要なことは、汎用性が高い（＝使用できる場面と使用できる方言が多い）ものが必要だという考え方である。とりわけ、これまでに提案された表記法、あるいは方言辞書などの印刷物に見える表記法は、ほとんどすべてが個別方言のことを考えて作られたものである<sup>2</sup>。

個別方言の表記法を1つ1つゼロから考えるのに比べて、時間とマンパワーが節約でき、同一の表記法を軸とすることで潜在的な活動規模の大きさが見込めるという意味で、発表者は個別方言で使えるのはもちろんのこと、琉球諸語のすべての方言を包摂し、同じ体系で複数の方言が書ける表記法を目指した。

##### 1.2 プロジェクト形式での表記法作成

比較的時間のある若手研究者を中心としたプロジェクトチームで実施した。琉球諸語全体を見渡して書き分けが必要な音を選び分けて表記の矛盾を防いだり、特定の方言への片寄り・肩入れが起きないようにしたりするという目的に沿ったもの。

“琉球諸語表記法プロジェクト”とその成果物である『琉球のことばの書き方』（小川編 2015、くろしお出版）を作成した体制。

- ・ 編者・執筆者など 14名 （琉球諸語の各地域から若手研究者中心）
- ・ アドバイザー 5名 （年輩研究者中心）

※資金はトヨタ財団の研究助成プログラム<sup>1</sup>から。

### 1.3 作成した表記法の特徴

全ての方言を包摂する表記法であるとともに、使用している補助記号もキーボードですぐに打てる記号を使うという方針で作成。

北琉球 奄美湯湾方言：うん たい だんごー しぱ うし こーたん=ちぱ  
un t'ai dangoo shi ushi kootan=chi  
(その二人相談して牛買ったって)

南琉球 宮古大神方言：すいま=ぬ ぷすたー むーな うかなーり  
sima=nu pstaa mmna ukanaari  
(島の人は皆集まって)

上記は小川編(2015)からの例文<sup>3</sup>、琉球語のなかでも比較的発音が難しいとされる地域の方言でも同じ1つの表記体系で書けるような設計になっている。なお、下地賀代子編著(2017)がこの表記法を使って作られた最初の辞典である。

## 2. 表記法がフィールドワークに与える効果

方言の表記法を話者が使える場合、琉球諸語の方言調査の効率が大きく上昇するという効果がある。端的に言えば、これまで面接調査でしか調査できなかったものが、日本語のように通信調査も可能になるからである。もちろん、多様な音を持つ方言を通信調査だけで調査するのは記述に不安が残るので、面接調査をする必要がないとは言えないが、例えば、語彙調査であれば、あらかじめ中舌母音(だと話者が直感を持つ音)が含まれる単語の出現が予測できているだけでも、調査における研究者の聞き取りの負担は大幅に減り、調査の効率が良くなる。

一般的な調査方法：ある意味の単語の語形を面接調査の場で聞き取る。



表記法が使える場合：あらかじめ話者に語形を書いてもらって単語リストを作り、面接調査では単語リストの音の**確認**をする。

方言調査に習熟していない大学院生などが調査する場合のハードルも格段に下がる。調査を進めて、その方言に慣れた調査者であれば、話者に文を書いてもらっての文法調査もできる。多くの方言が消滅危機に瀕しており、調査がしづらくなっている現状を鑑みると、言語記述における調査効率は重要視される必要がある(下地理則 2013 も参照)。

## 3. 表記法に対応したフォントの開発

トヨタ財団からの支援を再び得て<sup>4</sup>、既存書体の拡張によるフォント開発を行った。「しま書体(しま明朝・しまゴシック)」という名前で、書体デザインは

(有) 字游工房 (www.jiyu-kobo.co.jp)、システムは(株)リアルタイプ (http://realtype.co.jp) が担当。以下に、しま書体に搭載されている標準的な日本語では使わない文字を示す。紙幅の都合で「ア」などのカタカナは省略。

あ い が ぎ ぐ げ ご り ん ば う あ い う え お か き く  
 け こ が ぎ ぐ げ ご さ し す せ そ ぎ じ ず ぜ ぞ た ち  
 つ て と だ ぢ づ で ど な に ぬ ね の は ひ ふ へ ほ ぼ り  
 び ぶ べ ぼ び ぶ べ ほ ま み む め も や ゆ よ ら り て  
 る れ ろ わ あ あ い う え お か き く け こ た ち つ て  
 と な に ぬ ね の ぼ び ぶ べ ほ ま み む め も や い ゆ  
 よ ら り る れ ろ わ か く す し と ち が づ ん ふ ぶ む  
 る ん さ し す せ そ は ひ ふ へ ほ か き く け こ さ し  
 す せ そ た ち つ て と は ひ ふ へ ほ ぼ び ぶ べ ぼ あ  
 い う え お か く け こ し す ち と ふ む り る わ ん づ  
 ぎ ぐ じ ず ぢ ど ぶ あ ば づ え お ぶ ゆ ぶ

本予稿集原稿について、アルファベットと半角記号以外は原則として「しま書体」を使用して書いた。補助記号 ( ° ` ' ^ ~ > ) の見栄えなども確認されたい。

#### 新フォントの仕様・特徴

- ・ 游書体との親和性が高い (☞デザイナーが同じ)。
- ・ 欧文リガチャーによってアルファベットから仮名文字への“自動変換”を行うため、日本語入力で使われる IME (input method editor、e.g.ATOK) が不要。
- ・ 上記リガチャーを使う仕様のため、すべてのアプリには対応できないが、ワープロソフトでは Microsoft 社の Word<sup>5</sup>、Apple 社の Pages、表計算ソフトでは Apple 社の Numbers、加えて Illustrator などの Adobe 社製品全般の最新版で使えることを確認済み。テキスト形式のファイルでは問題がない。
- ・ 縦書き用と横書き用のフォントが別になっていて、縦書きにも対応している。

方言の教材、演劇の台本、日記、あるいは会報など、さまざまな場面での活用ができるものと考えている。また、Web フォントの技術を利用すれば、フォントがインストールされていないパソコンでも、しま書体を使ったホームページが文字化けすることなく表示できるようになる。

#### 4. 先の時代を見据えて

フォント開発というのは、第一義的には一般の方言話者のために行ったのだが、言語研究者にも恩恵が見込まれる。縦書きができたり、インターネット上でも扱えたりすると、新聞をはじめとして扱える媒体数が増える。それによって話者のモチベーションも上がり、安定した表記法によって書かれる「方言文献 (テキスト)」の数が増えると考えられる<sup>6</sup>。多くの方言が消滅の危機に瀕していて、話者なしで

方言研究を行わざるを得ない“フィールド文献学”（宮岡 1992、渡辺 1996）あるいは“文献琉球語学”の時代を見据えたとき、研究者にとってもフォントの存在は大きいはずである。

表記法とフォントはあくまでも道具であって、方言で書きたいという話者や非言語研究者には、書き方や使い方の指導が最初の段階では必要となる。そもそも「書けるなら書きたいが、方言は書けるはずがない」という意識を持っている話者もいる。「方言文献」が残されるというのは、後世の言語研究の広い分野にわたって有益だと信じるので、多くの方にご協力頂けるとありがたい。

## 注

1. 研究助成プログラム（2011年度）「琉球諸語表記法プロジェクトー多様な方言からなる琉球諸語を統一の規格で書き表わせる一般向け表記法の構築と今後の普及のための基盤づくり」（代表：小川晋史）、2年間で390万円。
2. 中本（1981）、平山編（1992）、岡村（2007）などの、複数の方言を対象としたものもある。
3. =（イコール）の記号は省略可としている。
4. 社会コミュニケーションプログラム（2017年度）「琉球諸語統一表記法フォント開発と電子的な利用の普及」（代表：小川晋史）、単年で600万円。
5. Wordの場合、あらかじめファイルの設定が必要。
6. テキストの重要性については下地理則（2011）を参照。

## 参考文献

- 岡村隆博（2007）『奄美方言～カナ文字での書き方～』南方新社。
- 小川晋史（2011）「これからの琉球語に必要な表記法はどのようなものか」『日本語の研究』7（4）,99-111.
- 小川晋史編（2015）『琉球のことばの書き方 琉球諸語統一的表記法』くろしお出版。
- 下地賀代子編著（2017）『つかえるたらまふつ辞典ー多良間方言基礎語彙ー』多良間村教育委員会。
- 下地理則（2011）「文法記述におけるテキストの重要性」『日本語学』2011年5月号、46-59.
- 下地理則（2013）「危機方言研究における文法スケッチ」田窪行則（編）『琉球列島の言語と文化 その記録と継承』45-80, くろしお出版。
- 中本正智（1981）『図説 琉球語辞典』力富書房金鶏社。
- 平山輝男編（1992）『現代日本語方言大辞典』明治書院。
- 船津好明（2010）「沖縄口さびらー沖縄語を話しましょう」琉球新報社。
- 宮岡伯人（1992）「奇傑ハリントンをめぐる巨匠たち アメリカ人類学の黄金時代」キャロベス・レアード『怒れる神との出会いー情熱の言語学者ハリントンの肖像』261-299, 一ノ瀬恵（訳）,三省堂。
- 渡辺己（1996）「第6章 テキストの蒐集と利用」宮岡伯人（編）『言語人類学を学ぶ人のために』143-157,世界思想社。